

(2) 中学部一般学級の取組

(1) 取組の概要

本学習グループは、平成25年度までの研究において、「育てたい力」の各観点を、年間を通じてすべての学習活動でバランス良く設定して育てていくため、目標設定や指導案作成の授業づくりプロセスを共有しました。そして、各教科等を合わせた指導において検証した結果、ねらいとしている観点到に偏りが見られました。そこで、平成26年度以降は教科別の指導の充実を図り、各教科でねらう力を「育てたい力」一覧表と学習指導要領の内容と重ね合わせながら学習内容を精選し、学習内容の偏りの改善をめざしました。その際、教科担当を決め、W・Mやブレン・ライティングの手法を用いて、①その授業で育てたい力②その力を育む学習活動③必要な支援④場の設定や準備物のように、話し合いの手順に沿った授業づくりを行いました。

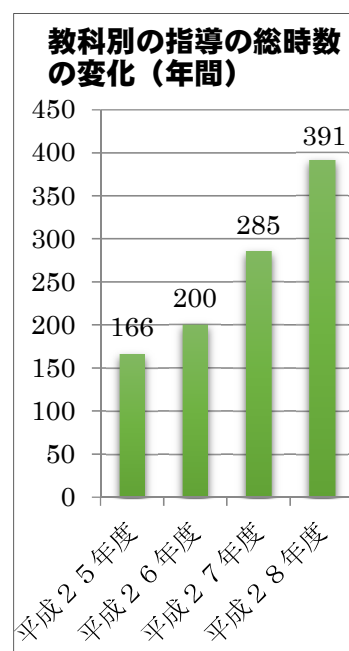
ARA・SHIの教育プログラムの構築にあたって重視したことは、個々の生徒の育ちをどのように評価し、授業づくりや教育課程の編成につなげていくかでした。そこで、Cスタイルの活用によって、日々の授業を包括的にプログラムすることにしました。

(2) 取組の内容

ア Plan(計画)

平成26年度からの3年間で、年々教科別の指導の総時数を増やし、学習内容の充実を図りました。平成28年度の教科別の指導の総時数は平成25年度と比較すると、約2.4倍、平成26年度と比較しても約2倍です。これは、全授業時数の30.5%にあたります。この時数増加の背景には、教師の専門性を生かした全9教科の実施でした。個々の生徒に必要な力を育む上で、教科別の指導を充実させるために、学習内容の設定や学習形態を工夫し、学習活動の振り返り・自己評価・他者評価の工夫、指導案回覧による授業評価と授業改善、指導の評価という一連の授業づくり・授業改善の流れを体系化する必要がありました。そこで活用したツールがCスタイルでした。このツールの活用によって授業づくりや指導内容や方法の共有を図りました。

そして、教科別の指導の充実を柱として各教科の視点で年間を通じて「育てたい力」を育む授業づくりの定着化を図り、「教科の視点で学習内容を構成する」「育てたい力を育む授業づくりのシステム化」「育てたい力を育む評価方法の工夫」という段階を設定して取り組んできました。この3年間で教育課程の評価と改善を重ね、学習指導要領の各教科の内容及び観点を捉えて学習内容を精選してきました。教科別の指導の時数を増やし、指導内容及び指導方法の一貫性を図ることで、生徒にとって見通しがもてる時間割となり、授業の目標や学習活動を明確にし、個に応じた十分な活動と環境の工夫、そして、生徒自身の成果が分かる評価方法の工夫を図りました。



国語・数学は、学級担任が個別の教育的ニーズに応じて学習内容を選択し、その教育的ニーズに応じて、学年内でのグループ分けを行いました。職業・家庭以外の6教科については教科担当者を配置し、学習グループ一斉もしくは実態別の2班編成を行いました。各教科担当者を担当教科のMT(主たる授業者)としました。また、その他の教師はST(サブティーチャー)として、小規模な班を編成して学習する際の指導者となりました。

各教科における学習内容の精選にあたっては、学習によって得た知識が、他者とのかわりや自然との触れ合い、くらしの中で生かされるよう、学習指導要領の内容と「育てたい力」一覧表の観点を重ね合わせながら設定しました。

各教科共通して取り組んだことは、教科の内容及び観点や日常生活において話題となっている事柄に着眼して、複数の学習内容を単元として扱ったことです。単元化することで、計画的に授業を進められるだけでなく、生徒が見通しをもちやすくなり、継続的な評価が可能になりました。この場合の評価とは、生徒一人一人の学習状況の評価、授業の評価、指導の評価です。この単元で扱う取組によって、学習形態の工夫、評価方法の工夫、振り返り活動が充実し、学級ごとの個人内評価の充実にもつながりました。

イ D o (実践)

(ア) グループ目標とキャリア発達

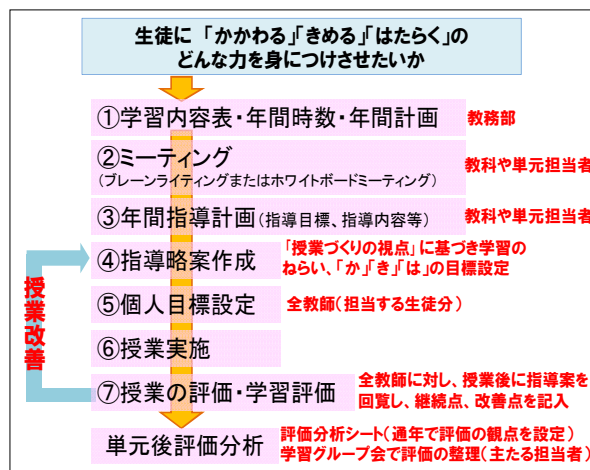
中学部段階は、職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、働くために必要な力を身に付ける時期です。具体的には、基本的な生活習慣を身に付けること、自主性や主体性を育てること、コミュニケーション能力を高めること、地域や社会への参加を促すことが挙げられます。

そこで、中学部段階におけるキャリア発達を、次のようにグループ教育目標から具体化して設定し、各学習のねらいや目標、指導内容に十分反映されるようにしました。

| | グループ目標 | 中学部のキャリア発達 |
|------|---------------|-------------------------------|
| はたらく | 「自らの役割を果たし」 | 学校や家庭における役割の明確化、発達段階に応じた役割の遂行 |
| かかわる | 「仲間と共に学び」 | 仲間と共に活動し、共に学び合い、認め合い、人とかかわり合う |
| きめる | 「新しいことにチャレンジ」 | もっている力を発揮し、自信をもって活動できる |

(イ) 授業づくりのPDCAサイクル

授業づくりのPDCAサイクルには、その授業でどんな力が身に付くのかの視点から授業改善、さらには、単元後の評価分析によって、教育課程の改善の根拠を蓄積していくことにしました。中学部一般学級における授業づくりにおける包括的プログラムであるCスタイルの活用により、より円滑な学習評価や授業改善が期待できます。



(ウ) 個別目標の設定

授業づくりのPDC Aサイクルには個人目標設定の項目を重視し、主たる授業者が作成した学習指導案を基に、個々の生徒の本時の目標を設定しました。さらに、目標の達成状況を評価基準に照ら合わせて評価しました。

(エ) 教科別の指導における実態差への対応

学習活動ごとに生徒32人を一斉に行うか2班編制をするか検討しました。1班を口頭またはスライドの指示を手立てとして活動する班、2班を動きや写真等の視覚支援を主な手立てとして活動する班としました。また、自立活動の指導目標に関連して、その目標を達成するために必要な支援配慮した班編制となるようにしました。

実態差へ対応するためには、チームティーチングで授業を行うことが大切です。そこで、一斉授業時に、指導者が進める学習内容の精選と主たる授業者の指導案と抱き合わせたS Tの指導案を作成し、個別目標達成に向けた手立てを講じることにしました。前に立つ授業者のために、誰かの良い授業が引き継がれるよう、授業の基本的な枠組みを共有できるシステムづくりを行いました。

学習意欲や主体性の高めるために

平成27・28年度熊本県立教育センター共同研究

テーマ
「インクルーシブ教育システムを踏まえ、障がいの状態に応じた主体的な学びをめざして」

| 学習意欲 | 主体性 |
|--|--|
| 学校の学習と自分の将来との関係に意義を見出す | 思考を働かせた目的的な行動 |
| <p><児童生徒に対して必要な視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の精選 ・身近に感じられる学習内容 ・生徒自身の生活とのつながり ・目標提示の工夫 ・教材提示の工夫 <p><教師に求められるもの></p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の障がいや必要とされる支援を捉えた指導(自立活動の視点) ・既得知識と興味・関心の把握 ・個別目標設定 ・MTとSTの連携 ・個々の生徒への評価の返し ・学んだことを実践する機会設定 | <ul style="list-style-type: none"> ・指導方法のルーティン ・教材・教具の共有化 ・授業展開(フォーマット)の統一化 ・授業内における形態の工夫 ・アクティブ・ラーニングの視点 ➢ A, Bどちらかを選ぶ(自ら選ぶ活動) ➢ 感想を書かせる(自己評価の蓄積の点検) ➢ グループで活動、話し合いをする ➢ 学んだことを他者に伝える ➢ 「いいね!」を見つける ➢ 「いいね!」を伝え合う ・自己目標確認と振り返り項目の連動 |

(オ) 学習意欲や主体性を高める工夫

平成28年度は、熊本県立教育センターとの共同研究において、主体的な学びに主眼を置き、学習意欲や主体性の側面からいかに「育てたい力」の醸成を図るかに迫りました。

ウ Check (評価)

(ア) 生徒の学習状況の評価

授業ごとにワークシートと評価シートを作成しました。評価シートには、その授業における個別目標に沿った評価項目が挙げられており、生徒の自己評価と教師による他者評価を一体にしたツールとしました。

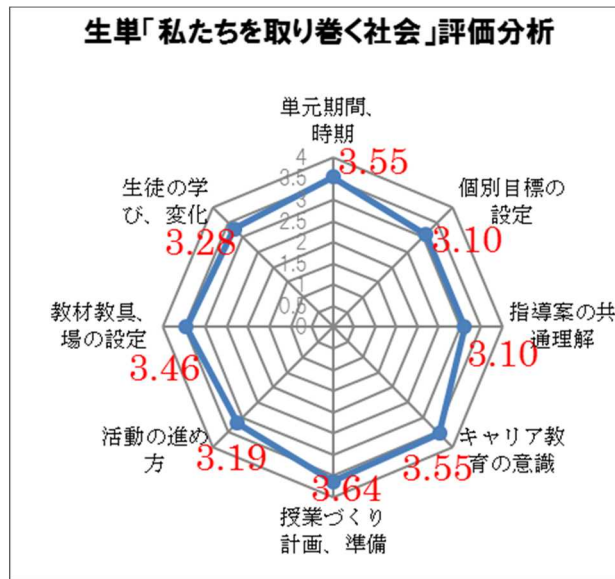
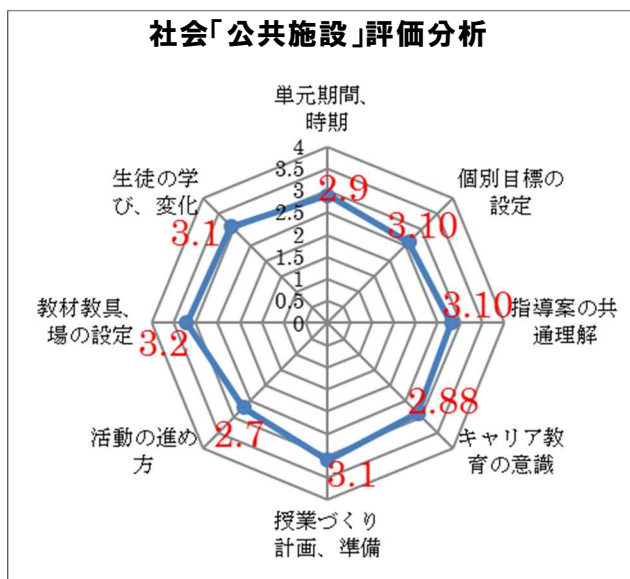
| | | | |
|----|--|--|------------------------------|
| 8 | こんなん 困難さがあってもそれを乗り越えようとした。  | できた まま できなかった  | 友達と一緒に考えながら活動に取り組みることができました。 |
| 9 | じぶん 自分を支えてくれる周囲への配慮に気づくことができました。  | できた まま できなかった  | 友達に自分から声をかけたり、気がかりなことができた。 |
| 10 | じぶん 自分の暮らしとのかかわりを考えることができました。  | できた まま できなかった  | 自分の得意なことをたくさん見つけることができました。 |

(イ) 授業の評価

指導案を授業の評価のツールとして活用しました。授業者が4観点を記入し、反省点・改善点・継続点を記入しました。その後、学習グループ教職員に回覧し、加筆するようにしました。その後、次時に活かせる点、教育課程の編成に活かせる点、他の授業に活かせる点に分けて集約しました。

| | | | |
|-------------------|---|---|--|
| 1:00 | 6 学習シート「私を取り巻く社会」にサブテーマを付ける。 | ・学習シートタイトル下に子の学習で一番印象に残った事柄をヒントにして設定する。 | |
| 1:05 | 休憩 | | |
| 1:15 | 7 評価シートに自己評価をし、教師の評価とのすり合わせを行う。 | ・個々の生徒に教師の評価を用意しておく。 ・教師のコメントを評価シートにのりで貼付する。 | ◎この場で自己評価の比較ができるから始め教師のコメントしておく。 |
| 1:25 | 8 発表会場に移動する。 | ・班分けをスライドに表示する。 | |
| 1:27 | 9 報告会で発表を行う。発表を聞き、いいねシールを貼る。 <i>（いいねは違うメンバーで貼る。原稿があれば発表の仕方なども学べることができると感じました。）</i> | ・班分け及び発表順は裏面2の通り。 | ◎④の成就感をあげられるよう、一人動を保障し、発表見守る生徒に対してを送る。 |
| 1:47 | 10 嶋村先生の話の聞き、終わりのあいさつをする。 | ・今単元で学んだことで大事にしたいことがらについて話をしたい。 ・グループ長の号令であいさつをする。 | |
| 反省点 改善点 教員案 | ・ワークシート(評価シート)の活用。 ・評価シートに、教師のコメントと生徒の学習内容を記入した。 | | |

(ウ) 指導の評価



指導の評価では、単元ごとに8つの評価の観点を設け4件法と自由記述によるアンケートを集約しました。この集約を単元ごとにすべての学習に行うことにより、授業改善に活かすとともに、教育課程改善の視点とし、次年度の編成に活かすことができました。

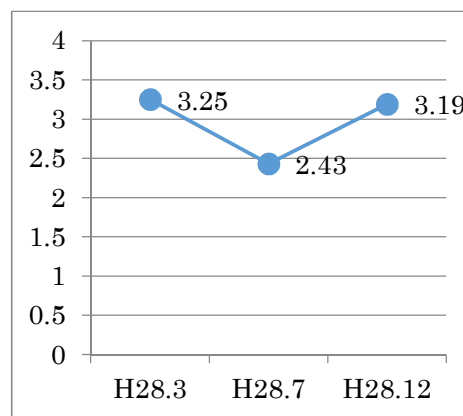
E Action (改善)

(ア) 授業の評価の集約結果と指導の評価を併せて教育課程の評価に活かす

教育課程の編成にあたり、教科別の指導に重点を置く際に、どんな内容(指導内容)を選択し、それらをどのように組織(指導形態を組合せ)し、どれくらい(授業時数を配当)で行うかの視点で、年間計画を見直しました。また、生活に結びついた学習活動や生活の課題に沿った多様な生活体験、できる限り生徒の成功体験を豊富にするとともに自発的・自主的な活動を大切にするなど、各教科の学習内容を般化する場面を生活単元学習及び総合的な学習の時間に設定するようにしました。

(イ) 個別目標の設定

個別目標を設定した上で授業に臨み、それを評価や改善につなぐことは課題でした。個別目標設定に関するアンケートにおいて、平成28年12月の数値は、平成28年3月の水準に戻っていません。一人一人に「育てたい力」を設定したことは、教師にも生徒にも分かる目標設定となり、生徒の主体的な活動につながる学習内容、指導方法(個々の生徒に必要な支援、目標を達成するための手立て等)が伴う授業づくりができました。

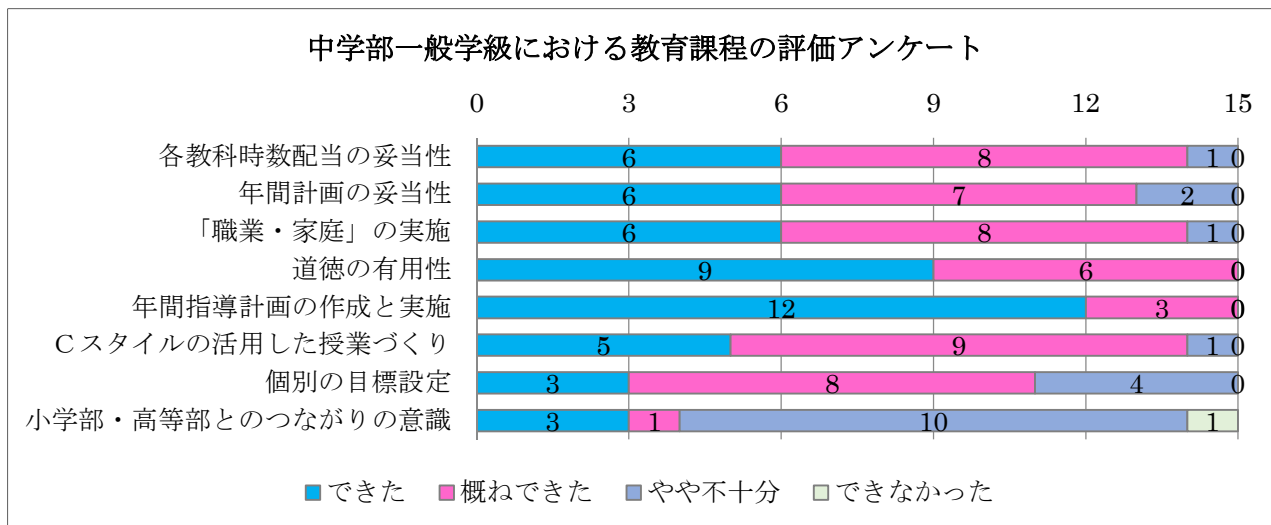


(ウ) Cスタイルの各ツールの運用状況を評価し、
教育システムの改善を図る

授業づくり及び授業改善で用いるツールは、指導案、評価シート、評価分析シート、Cスタイルでした。それらからキャリア教育の視点に基づいた一人一人の生徒が確かに育つよう、カリキュラム・マネジメントの展開を図りました。

(3) まとめと今後の方向性

中学部一般学級では、教育課程の中間評価として授業づくりや授業改善に関するアンケート調査を行いました。



上記の評価項目は、主に平成27年度から平成28年度にかけて改善した点について調査していますが、「小学部・高等部とのつながりの意識」の点で低い評価となった。自由記述からは、「他学部の授業を見たことがない」「自分の学部で精いっぱい」「漫然としか知らず、自分の学部とどのようにつながるか想像できない」などの意見が挙がりました。キャリア教育を進める上で、小学部の取組をつなぎ、高等部へとつなぐ意識をもつことが重要であることを改めて示していました。

これまで学習の機会がなかった観点を教科別の指導で補う教育課程を編成したことで、教科別の指導の充実を図り、学習内容の系統性や段階性を吟味することができました。このことは、この取組を継続するに値するように考えます。今後もCスタイルを軸とした授業づくり・授業改善を通してARA・SHIの教育プログラムの構築に向けて取り組んでいきます。